# 英語の4技能の習得に関する基礎的研究

最終更新日：2015年8月31日

英語教育講座
教授
森　千鶴

**キーワード**　英語の4技能（聞く、話す、読む、書く）、ボトムアップ処理　、トップダウン処理、タスク活動

## 研究シーズの説明（私は、このような研究に取り組んでいます。）

私は、小学校の外国語活動や中学校・高等学校の英語科における4技能の習得に関する研究を行っています。4技能の中でも、特に「読む」「書く」の2技能を重点的に研究しています。それというのも、日本のようなEFL（英語を外国語として学ぶ）環境であれば、英語に触れる機会は限られているので、必ずしもネイティブの習得順序（**聞く→話す→読む→書く**）でうまくいくとは限りません。たとえば、（**聞く→読む→書く→話す**）の習得順序のほうが、ぴったりとくる学習者もいるのです。つまり、日本で英語を学ぶ環境であれば、4技能をどのように組み合わせて指導するかも含めて、「4技能の統合」が課題になってきます。「読む」「書く」はアウトプットへの橋渡しという意味でも重要な技能です。それ自体が技能統合的である活動として、ボトムアップ処理レベルでは音読や書き写し、トップダウン処理レベルでは、要約やディクトグロスなどがあります。私は現在は主に音読と書き写しの効果的な実施に関する研究を行っています。

さらに究極の技能統合として、タスク活動があります。タスク活動とは、現実の言語使用に近い場面を設定し、実際に言葉を使ってみる体験的な活動です。「体験的」という意味では小学校の外国語活動に適しています。そこで私はタスク活動に関しては、主として公立の小学校や附属中学校の先生方との共同研究という形で研究をすすめています。

## 成果の応用可能性（私の活動の成果は、このような分野にこのように貢献することができます。）

- 小学校の「外国語活動においては、中学校との連携を考えるうえで、「書き言葉」の導入は重要です。そこで、書き言葉のタスク活動（たとえば英語のお手紙、名刺づくり、招待状、ポスターを作る）を導入し、生徒には書き言葉に慣れさせると同時に、それをきっかけとしたコミュニケーションを体験させることに意義があると思われます。
- 中学校においては、入門期の英語、とくに「書くこと」が重要です。また入門期以降も、中学校や高等学校では書き言葉そのものを目的とする活動も増えてきます。そこで生徒は、ある程度正しい発音で単語を発音し、そして文を音読し書けるようになる必要があります。何度繰り返して音読し、書き写せばよいのかは、学習者のタイプによって異なります。この点については私の研究成果を直接的に応用することができます。
- 高等学校においては、書き言葉中心の指導から、聞く・話すを取り入れた4技能統合が求められています。音読や書き写しでボトムアップ処理を徹底させ、その次の段階として、要約やディクトグロスでアウトプットにつなげていくことができます。さらにそれを自由英作文やプレゼンテーション、またコミュニケーション活動につなげ、話し言葉に転換させていくことで4技能の統合は実現します。

## これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

- 福岡県教育委員会主催 「高等学校英語教員指導力向上事業」助言者（平成24年度～現在）
- 福岡教育大学研究開発プロジェクト （言語活動の充実）（平成23年度・24年度）宇美町立原田小学校との共同研究
- 福岡教育大学総合教育研究所における研究プロジェクト（平成26年度・27年度）宗像市立赤間小学校との共同研究
- 福岡教育大学版COC事業 （那珂川町および糸島市の小・中学校との連携）（平成26年度・27年度）
- 第61回九州地区英語教育研究大会（九英連福岡大会） 公開授業　中学校の部　指導助言者（平成26年度）